

論語は、まず「学」という字から始まります。

「子曰く、学びて時にこれを習う、また喜ばしからずや」です。学ぶとは真似ぶ、つまり真似ることです。しかし、真似をするだけではすぐにはできません。そのためには同じことを100回、200回と繰り返し返さなければいけません。

「習」という字は、鳥が“羽”を“百回”も羽ばたくという意味です。卵から孵った雛は、親のすることを真似します。つまり「学」です。しかし一回や二回やったからといって、飛べるようにはなりません。100回も200回も繰り返してやらなければ、つまり「習」がなければ飛べるようにはなりません。

昔の人は「読書百遍」といいましたが、この百というのは、教の多いことを表す言葉で、何度も繰り返し本を読みなさいという教えです。一回や二回で中身がわかるということはありません。これが「習」という言葉の持つ本当の意味なのです。

繰り返しやれば、今までできなかったことができるようになります。わからなかったこともわかるようになります。だから楽しいのです。つまり自分から学ぼうという意欲がなければ、「学習」とは言わないのです。こ

の「学習」に似た言葉に「勉強」という言葉があります。「勉強」というのは、「強」という文字が示しているように、努力してやることです。先生や親にやれと言われてやるのが「勉強」です。「勉強」はあまり効果がありません。

「学習」と「勉強」という意味を厳密に使い分けて欲しいものです。「勉強」は自らやることだと思っているかも知れませんが、勉強というのは、課せられた仕事、つまり責任を果たすために努力することです。本当はやりたくなくてもそうせざるを得ない、それが勉強の本来の意味です。

商売人が「勉強しておきます」というのも、とてもそんな値段では売れないけれども、我慢して、その値段で売りましょうということから“勉強”という言い方をするので。

勉強は学習に比べて効果は少ないということを知ってください。学問というものは自分から進んでやらなくては効果がうすいのです。

ポイント:私たちの胃袋は食べたものを消化、分解しますが、これは工場並の高度な設備が必要なのです。でもそれを無造作にこなしているわけです。そして頭の中はもっと複雑で高度なことをやってのけています。頭は単に言葉を記憶しているだけでなく、消化して法則を作り出しているのです。そうでなければ、幼児でもちゃんと五段活用ができることの説明が付きません。